令和５年度　紫香楽宮フォーラム

紫香楽宮と恭仁宮

日時　令和５年（2023年）12月17日（日）
　　13時00分～16時30分

場所　あいこうか市民ホール

主催　甲賀市教育委員会

目　　次

事例報告１　考古学から迫る古代宮都の「特異点」・恭仁宮　１

事例報告２　発掘調査でわかった紫香楽宮の中心部　１２

スケジュール

１３時００分　開演

１３時１０分　事例報告１
考古学から迫る古代宮都の「特異点」・恭仁宮
京都府教育庁文化財保護課　古川　匠

１４時１０分　事例報告２
発掘調査でわかった紫香楽宮の中心部
甲賀市教育委員会歴史文化財課　小谷　徳彦

１５時１０分～１５時２０分　休憩

１５時２０分　フォーラム　紫香楽宮と恭仁宮
コーディネーター　龍谷大学　國下　多美樹
パネラー　古川　匠　　小谷　徳彦

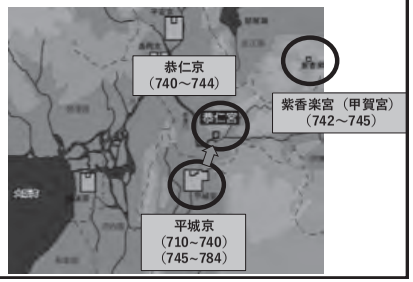


古代宮都の流れにおける恭仁宮・恭仁京の位置

- 京都府で、本格的な都城として最初に造られた都。
- 「国分寺建立の詔」と「墾田永年私財法」が作られた。
- 都市を造るにはあまりにも狭い立地。宮の構造が独特。
- 宮都の歴史の流れの中にうまくはまらない。古代宮都の「特異点」

※特異点とは…一般的な基準をうまく適応できない点（数学の用語）

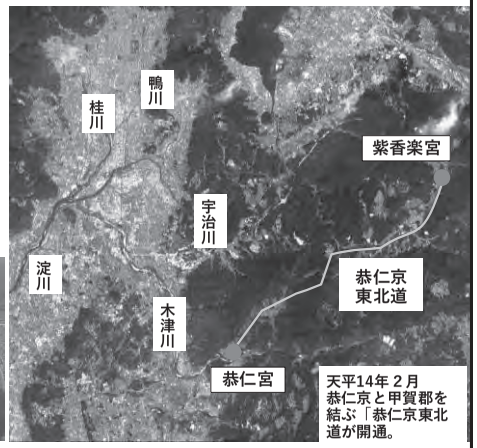

聖武天皇（701-756）



恭仁宮が造られた場所

- 現在の京都府木津川市加茂町、「瓶原地区」と呼ばれる地域。
- 木津川に面し、河川を利用した物資の運搬に適した、便利かつ風光明媚な場所。
- 万葉集巻六1037「今造る久迩の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし」大伴家持

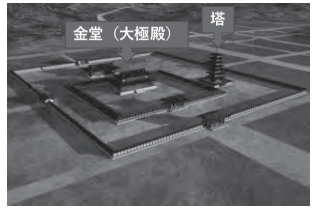

現在の瓶原地区



現在の恭仁宮跡

恭仁宮のあとに造られた山城国分寺金堂（恭仁宮大極殿）と塔の基壇が地上に残るが恭仁宮の遺構は地下に埋もれている

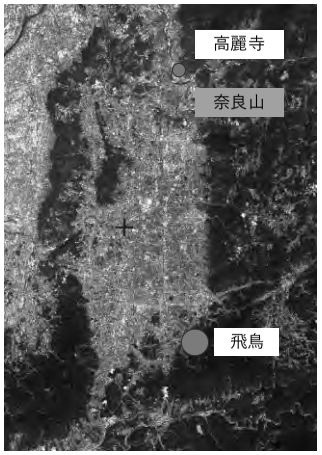





塔基壇
（ⓒ一般社団法人 木津川市観光協会）

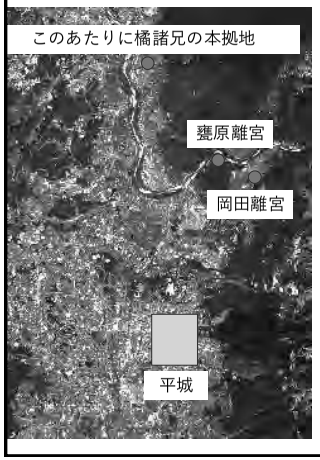

金堂（恭仁宮大極殿）基壇

飛鳥時代の山背国



- 政権の中心があった大和国の近隣で、大和を支える役割をもっていた。
- 大型の古墳を造る勢力がこの時代には既に存在せず、京都府南部では、渡来系氏族（秦氏など）が土地開発を活発に行っていた。
- 国名：「山背国」　「山」（奈良山丘陵）の背後にある国。「山城国」になるのは平安時代になってから。
- 奈良盆地東南部の飛鳥を中心とする政権からは心理的に遠かったのではないか。山の向こう。

平城京・宮からみた山背国



- 奈良盆地の北端にある平城宮にいる天皇から見ると、自分の背中側にある国。
- 山背国最南部（現在の木津川市加茂町）に離宮が造られる。風光明媚で手軽な旅行で政務の重圧から解放される場所。
  - ・岡田離宮
    和銅元年（708）　元明天皇が行幸
  - ・甕原離宮
    和銅４・６・７年　元明天皇
    霊亀元年　元正天皇が行幸
    神亀２・４年、天平８・11年　聖武天皇が行幸
- 現在の井手町を本拠地とした橘諸兄が力を蓄え、「相楽別業」で天皇を歓待。

井手寺跡・栢木遺跡（橘氏の氏寺）

- 令和３年（2021）の発掘調査で、五重塔跡が見つかる。（井手町の新庁舎建設予定地）
- 橘諸兄が興した橘氏の氏寺と考えられる。





➡ 橘諸兄（684～757）

皇族であったが、臣籍降下し、橘姓を賜る。聖武天皇の皇后・光明子の異父兄。聖武天皇の治世を支えた重要な人物。

聖武天皇と京都府南部（山背国）①

- 文武天皇の第一皇子として誕生する。和銅７年（714）に元服、立太子。
- 皇太子時代の甕原離宮行幸に同行していた可能性がある。（和銅７年に元明天皇、霊亀元年に元正天皇）
- 奈良時代の「行幸」は天皇に限らず、皇太子も同行するのが通例。
- 聖武天皇は即位後も数年に１度、甕原離宮に行幸。山背国に対して個人的に親しみを持っていたのでは。

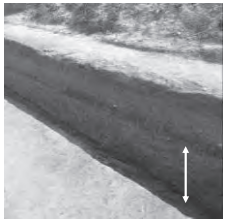


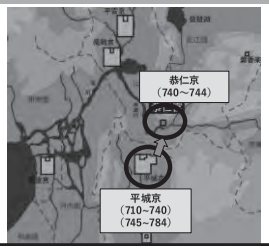
聖武天皇（701-756）

聖武天皇と京都府南部（山背国）②

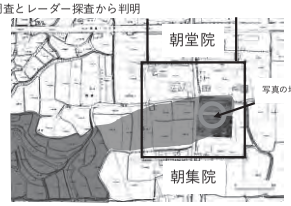
- 天平７年（735）～９年（737）　天然痘の大流行。遣唐使が唐で罹患し、持ち帰ってしまった。総人口の25－35％が死亡。
- 天平９年（737）国政を担った藤原四兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）が死去。
- 傍流の皇族であった橘諸兄が政権の中心に。

天平12年（740）聖武天皇は平城京を発ち、同年12月、恭仁京を都とした。





谷地形を長さ150ｍ以上にわたって埋めた整地（入念な準備の痕跡）が発掘調査とレーダー探査から判明



恭仁宮・恭仁京の探求

- **墾田永年私財法**
  - **天然痘の大流行で人口が大幅に減少し、衰退した国力を回復するため、有力者が率先して開発に取り組めるようにした。**

国分寺建立の詔

- **諸国の佳い場所（「国華」）に七重塔を伴う寺院を建てるように命じた。**

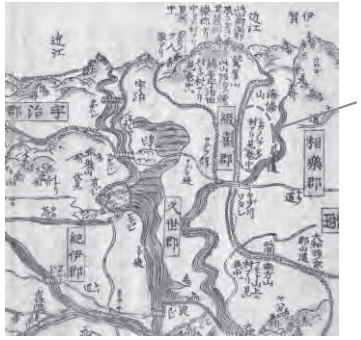
- **奈良時代のターニングポイント**
  - **聖武天皇が独自の国家的展望を胸にいだいて造った都。**
  - **続日本紀**天平十二年十月廿六日条〇己卯。「勅大将軍大野朝臣東人等曰。朕、縁有所意。今月之末。暫往関東。」**（意図を知らせていない）**
  - **聖武が意図を述べていないので、探求の対象となってきた。**

恭仁宮探求のあゆみ①　江戸時代

- 江戸時代に編纂された地誌『山州名跡志』、『山城名勝志』などで取り上げられる。
- 『続日本紀』（平安時代初期に編纂された勅撰国史）の記述、万葉集所収の大伴家持の歌などが記載された。恭仁宮の場所も考察。瓶原の対岸、木津川の南にあると考えられた。



『山州名跡志』正徳元年（1711）



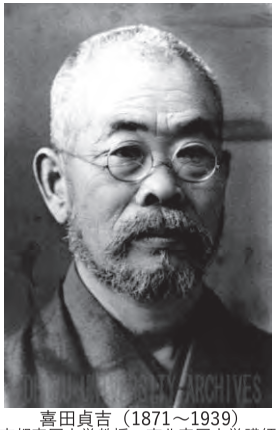
『山州名跡志』恭仁宮跡周辺図（左が北）

恭仁宮探求のあゆみ②　明治・大正

近代の実証的研究がはじまる。喜田貞吉は恭仁宮の所在は瓶原である、と1900～1910年代に主張。江戸時代以来の通説に反論。
・交通至便で風光明媚
・藤原氏に代わって台頭した橘諸兄の勢力圏



明治時代の瓶原



喜田貞吉（1871～1939）
京都帝国大学教授・東北帝国大学講師
（古代史・民俗学・考古学）

恭仁宮探求のあゆみ③　昭和（歴史地理）

足利健亮は、平城宮・京の発掘調査成果も視野に入れながら、昭和44年（1969）に恭仁宮の範囲と各施設の位置を歴史地理学の手法（現在の地形、地割、地名等から考察）で推定。

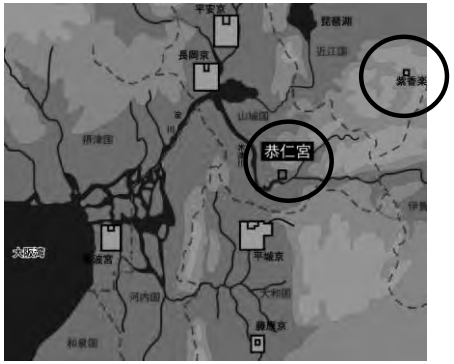




足利健亮（1936～1990）
京都大学教授（人文地理学）

恭仁宮探求のあゆみ④　昭和（文献史学）

・紫香楽宮に大仏を建立するための拠点であった。（瀧波貞子説）

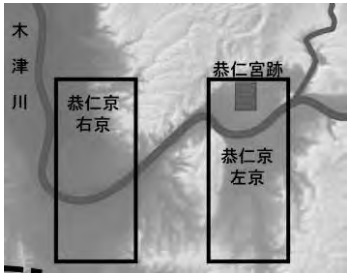


恭仁宮探求のあゆみ④　昭和（文献史学）

・木津川が恭仁京を横断して東西に流れるのは、中国の洛陽の都をモデルにしている。（瀧川政次郎）



洛陽（隋唐期）



恭仁京（足利説・奈良時代）

・恭仁宮の工事に渡来系氏族の秦氏が大きな役割を果たした。（井上満郎）
『続日本紀』天平14年（742）８月５日記事　「大宮垣築造の功により、造営録正八位下の秦嶋麻呂が従四位下に昇進（十三階昇進）した。」（大意）

京都府・木津川市（旧加茂町）教育委員会が発掘調査を開始（幻の都から現実の都へ）

1973年（昭和48）文献・分布調査
1974年（昭和49）発掘作業を開始









瓶原地区の住民のみなさん、考古学専攻の大学生が長年にわたる調査に参加することに。

大極殿基壇の発掘調査（昭和51年）

大極殿（だいごくでん）とは
　年賀の儀礼、天皇の即位といった国家儀礼が行われた建物。国家の最中枢に位置づけられる。

基壇（きだん）とは
　周辺の地盤より一段高く土を盛り上げて建物の基礎としたもの



恭仁宮大極殿の基壇



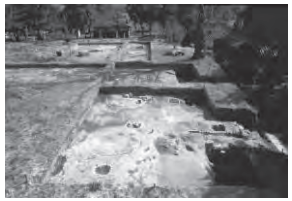


恭仁宮大極殿復元CG

大極殿基壇の発掘調査で、大極殿の柱の位置、間隔が判明＝建物の規模が復元可能に

平城宮の復元大極殿は恭仁宮大極殿の調査成果から





柱の数、間隔は恭仁宮の調査から判明





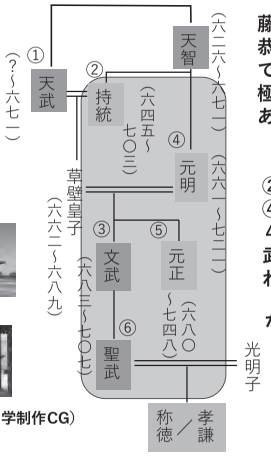
礎石の形状、大きさも恭仁宮が参考にされた。

大極殿は藤原宮から平城宮、そして恭仁宮へ





（※奈良産業大学制作CG）



藤原宮・平城宮・恭仁宮の発掘調査で、３つの宮の大極殿は同じ建物であったことが判明。

②持統、③文武、④元明、⑤元正４代の大極殿が聖武天皇に受け継がれた。（※天武天皇からかぞえた代）

出土瓦の分析①



左・中：恭仁宮造営にあたって新しく造られた瓦
右：平城宮から運ばれた瓦

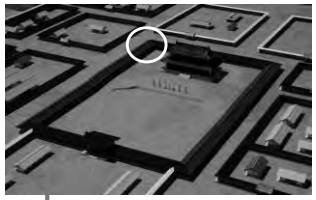
新しい瓦は目立つところに用いられた。

出土瓦の分析②

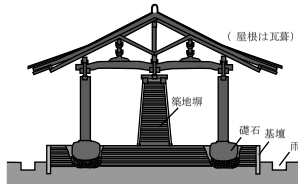


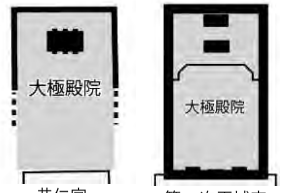
人名が押印された瓦。「中臣」「大伴」などの姓を表すものや「真依」「太万呂」などの名を表すもの。瓦を製作した工人を示す。瓦工房では、出来高払いで工人に給与が支払われた。

大極殿院築地回廊跡の発掘調査（平成19年）









恭仁宮　第一次平城宮

築地回廊の柱間隔が第一次平城宮と一致。「平城宮から恭仁宮に大極殿と築地回廊を移築した」、とする『続日本紀』の記述のとおり。大極殿院の形状も第一次平城宮と共通することが判明。

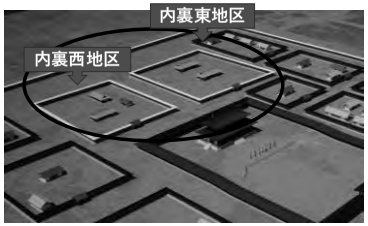
東西に並ぶ2つの内裏（昭和51年～平成16年）

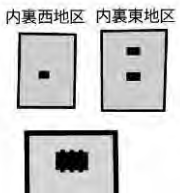


内裏東地区大型掘立柱建物跡

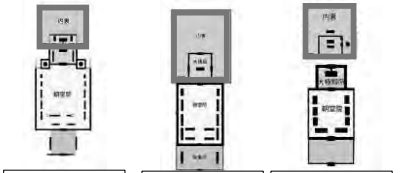


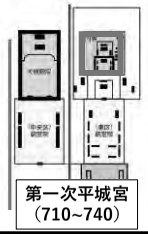
内裏西地区北東角





飛鳥・奈良時代の他の宮と異なる内裏の位置と構造



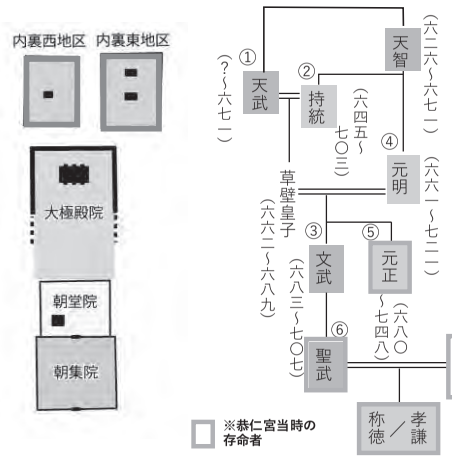






・主要区画の北端に一つの内裏があるというルールから逸脱

内裏西地区・東地区の居住者は？



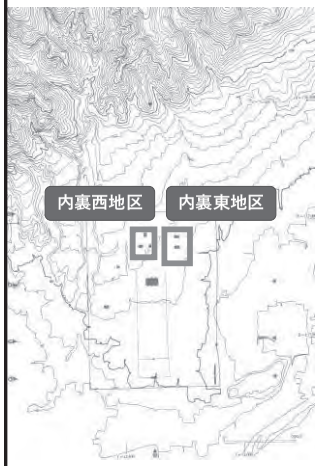
当時の存命者は聖武天皇、元正太上天皇、皇后光明子、皇太子の阿倍内親王（後の孝謙／称徳天皇）。

聖武天皇と同等の区画を用いることができるのは、元正太上天皇だけ。

『続日本紀』
天平13年７月（元正）太上天皇、新宮に移る。天皇河頭に迎える。

内裏東・西地区の居住者は聖武天皇と元正太上天皇と見るのが妥当。

聖武天皇はどちらの内裏にいたのか①　内裏西地区説

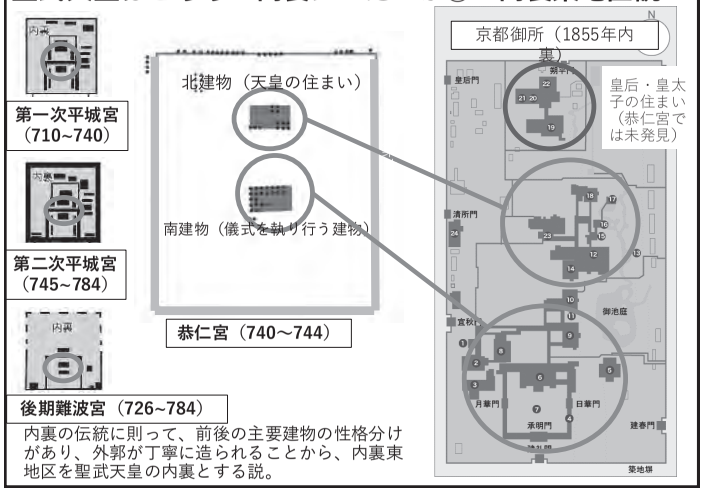




標高が高く安定しているのは内裏西地区。一方、内裏東地区は標高が低く、東に向かってさがる緩斜面にあたる。

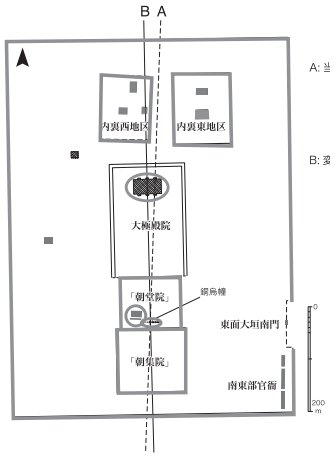
内裏西地区が聖武天皇の内裏とする説。

聖武天皇はどちらの内裏にいたのか②　内裏東地区説



内裏の伝統に則って、前後の主要建物の性格分けがあり、外郭が丁寧に造られることから、内裏東地区を聖武天皇の内裏とする説。

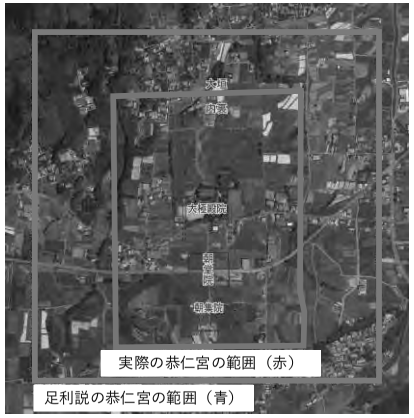
古川説（内裏西地区・内裏東地区の造営順序）



- 恭仁宮の施設は主軸方向の差が顕著。
- 主軸ａ：Ｎ－0.5～1.5度－Ｅ（赤）、
- 主軸ｂ:Ｎ－１～２度－Ｗ（青）
- 主軸ａは天平十三年元日朝賀関連遺構が含まれ、主軸ｂは大極殿（天平十四年中）、宮大垣（天平十四年八月完成）が含まれる。
- 同じ空間で主軸ａと主軸ｂの施設が併存する場合、内部の建物が主軸ａ、外郭施設が主軸ｂ。内部の建物が完成した後に外郭を造るのが通例かつ合理的な施工順序。
- 主軸ａとｂには時期差が存在する。**内裏西地区→内裏東地区では。**

紫香楽宮内裏でも聖武天皇は西側にいた可能性が指摘されている。

宮外郭の発掘調査（平成元年～８年）




外郭東・礎石立ちの門跡


外郭南西角・大垣基礎の石垣

恭仁宮の外郭が、当初の想定よりも一回り以上小さいことが判明

版築の大垣（築地塀）

版築：板材を平行にならべたあいだに土を入れて突棒で付き固める工法。築地塀、基壇などに使用。


版築の築地塀（京都市内の寺院）


突棒の痕跡


板材（堰板）の木目が転写されている。

恭仁宮外郭大垣のイメージ（平城宮外郭大垣）


平城宮朱雀門の両脇に復元されている外郭大垣

版築で付き固めるため時間を要する工法。

『続日本紀』（恭仁宮大垣の記事）
天平十三年（七四一）１月１日「宮垣未就。」
天平十四年（七四二）８月５日　「詔、授造宮録正八位下秦下嶋麻呂従四位下・・・以築大宮垣也。」

難工事であったことが分かる。



恭仁宮の大垣も、高さはほぼ同じか。

主要区画の調査（～令和３年）



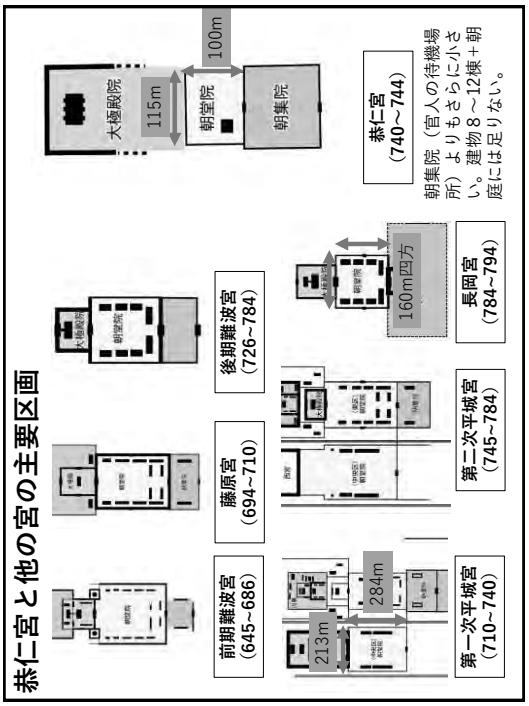


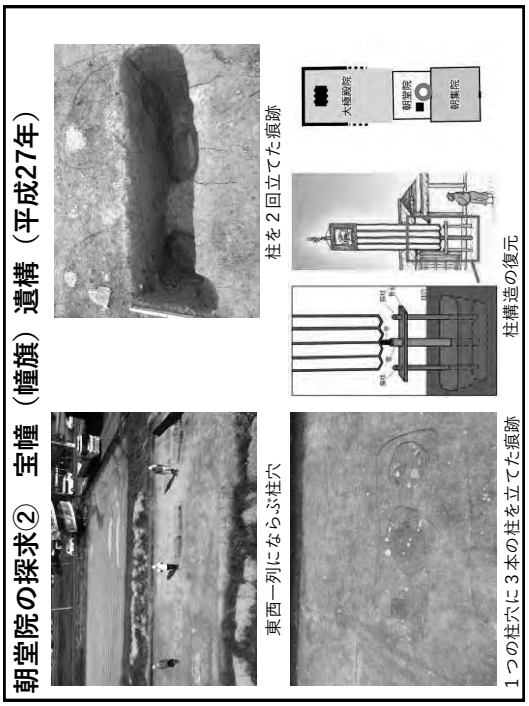


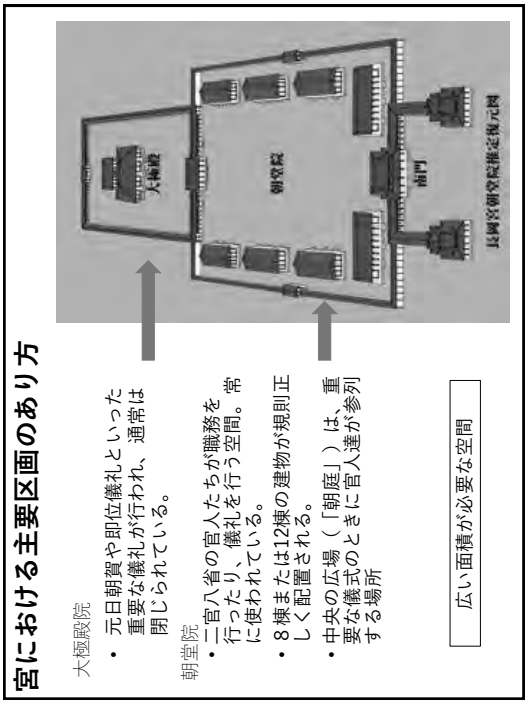

掘立柱塀の工事イメージ

主要区画の大きさを確定するのに多大な時間を要した。

朝堂院・朝集院の掘立柱塀跡

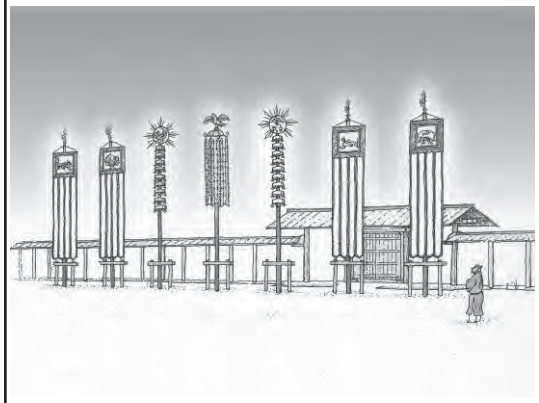

恭仁宮と他の宮の主要区画
前期難波宮
(645~686)
藤原宮
(694~710)
後期難波宮
(726~784)
第一次平城宮
(710~740)
第二次平城宮
(745~784)
長岡宮
(784~794)
恭仁宮
(740~744)
大極殿院
朝堂院
朝集院
115m
100m
213m
284m
160m四方
朝集院（官人の待機場所）よりもさらに小さい。建物８～12棟＋朝庭には足りない。


朝堂院の探求②　宝幢（幢旗）遺構（平成27年）
東西一列にならぶ柱穴
柱を２回立てた痕跡
１つの柱穴に３本の柱を立てた痕跡
柱構造の復元
大極殿院
朝堂院
朝集院


宮における主要区画のあり方
大極殿院
・元旦朝賀や即位儀礼といった重要な儀礼が行われ、通常は閉じられている。
朝堂院
・二官八省の官人たちが職務を行ったり、儀礼を行う空間。常に使われている。
・８棟または12棟の建物が規則正しく配置される。
・中央の広場（「朝庭」）は、重要な儀式のときに官人達が参列する場所
広い面積が必要な空間
大極殿
朝堂院
南門
長岡宮朝堂院推定復元図


朝堂院の探求①　朝堂建物（平成24~26年）
大極殿院
朝堂院
朝集院
朝堂建物の遺構
（各柱穴の横に恭仁小学校５・６年生に立ってもらった。）
朝堂院南西部でみつかった建物跡。
柱の痕跡から、床の高い構造であることが判明。
通常、朝堂建物は床が低いので、きわめて特異な構造。

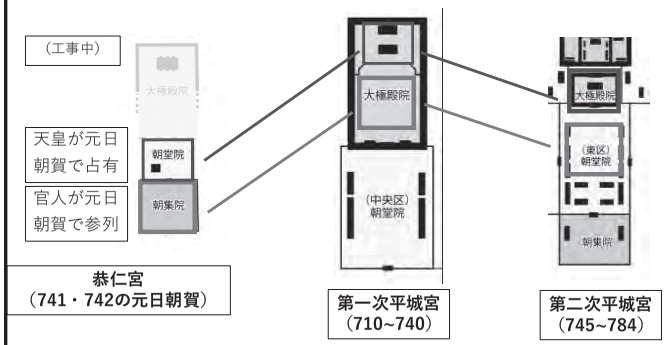
朝堂院の探求②　宝幢（幢旗）遺構



『続日本紀』
天平十三年（七四一）正月癸未朔。天皇始御恭仁宮受朝。
天平十四年（七四二）春正月丁未朔。百官朝賀。為大極殿未成。権造四阿殿。於此受朝焉。
天平十五年（七四三）正月癸卯。天皇御大極殿。百官朝賀。

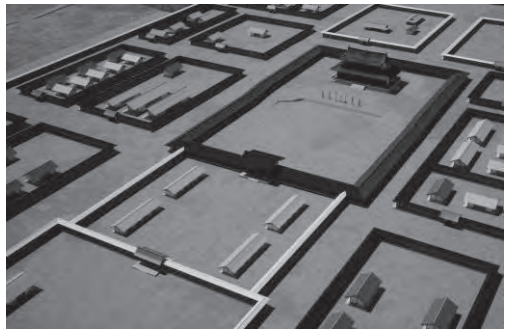
元日朝賀など重要な行事の際に大極殿の前に立てられる。『続日本紀』の記述から、恭仁宮では大極殿完成前の13・14年の元日朝賀がどこか別の場所で行われたことは知られていたが、発掘調査から、朝堂院で行われたことが判明。柱を立てた回数も合致。

朝堂院の探求③　朝堂院・朝集院は恭仁宮独特の機能



- 恭仁宮「朝堂院」の機能は、「仮設の大極殿院」（天平13・14年限定）
- 恭仁宮「朝集院」の機能は、「仮設の朝庭（官人の空間）」（　〃　）
- 朝堂院・朝集院の大きさは、第一・二次平城宮の儀礼空間と概ね合う。
- 恭仁宮の朝堂院は、いわゆる朝堂院ではない。（建物も「朝堂」ではない。）

朝堂院の探求④　中央区画の実態は



恭仁宮CG（本格的な整備状況を推定）



見つかった遺構

- 仮設の儀礼空間として使われたあとの中央区画の本格的な整備を示す遺構は見つからず。
- 遺構が削られたか、本格整備がされる前に廃都となったのか、２つの考え方があり得る。

恭仁宮発掘50年のあゆみの主な成果

平城宮から移築された大極殿の実態解明

- 大極殿の規模が判明。遺構の残存状況が良好
- 『続日本紀』に記されるとおり、大極殿と大極殿院回廊が平城宮から移築されたことが判明

独自の構造が判明

- 東西にならぶ２つの内裏
- コンパクトな全体構造

独特な空間利用が判明

- 朝堂院は、古代の宮としては非常に小さい
- 朝堂院と朝集院を元日朝賀の場として活用

難航した発掘調査のあゆみ

・ほかの宮（平城宮跡など）とは異なる恭仁宮独自の構造

「独自の殿舎配置・特殊性」、「他宮とは単純に比較できない」（1981年の記述）

・調査の指針とした足利説よりも小さいことが判明

「昭和59年から63年まで外郭を探す努力をしたが、まったく見つからない。」（1989年の記述）

・ほかの宮の発掘調査成果を援用できない。
・調査にあたっての「羅針盤」であった足利説が適用できない。

↓

白紙の状態で、宮を構成する空間の場所と大きさ、空間の機能が全く不明な恭仁宮に向き合うことに。相当な労力と時間を要した。

恭仁宮発掘50年で深まった謎

国分寺建立の詔・墾田永年私財法が発布された政務空間（「朝堂（院）」）はどこか？

- 天平十六年（744）１月１日　「朝堂で五位より上の官人を饗す」
- 天平十六年（744）閏正月１日　「朝堂で百官に恭仁・難波のいずれを都と定めるべきか尋ねた。」

→宮の東部または西部が有力な候補になる。しかし、国家を支える官衙（「曹司」）群は宮の中に収まるのか、という疑問。

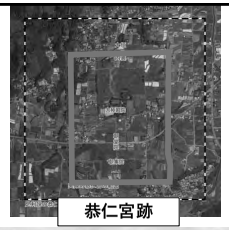
恭仁宮の付帯施設はどこにあるのか？

- 『続日本紀』によると、恭仁宮の近隣には、「城北苑」（庭園）、「石原宮・甕原離宮」（離宮）、皇后宮（皇后・光明子の居住区）があったとされる。

紫香楽宮跡から学ぶ

恭仁宮と紫香楽宮（甲賀宮）
どちらも古代国家の中心としては小規模

恭仁宮　750×560メートル
紫香楽宮中心部（宮町遺跡）400メートル四方くらいか



恭仁宮跡

ただし、紫香楽宮は官衙群が周辺に点在、複合的な構成であることが明らかに。（２㎞四方以上の範囲に展開）

国家の運営に携わった役人の数、体制は同じ規模だったはず（２つの宮は完全に同時代）。

恭仁宮でも、関連施設が中心部の周辺に展開する可能性があるのでは。



紫香楽宮跡（宮町遺跡と関連遺跡群）

恭仁宮発掘100年（!?）にむけて



- **恭仁宮発掘50年のあいだに、地上から地中遺構を調べる手法が発展した。**
- **今後の50年を見すえて、先端技術を活かした調査を試みる必要がある。**
- **技術も使う人次第。調査担当者が、とても手強い恭仁宮と真剣に向き合う覚悟が必要。**

- **そして、紫香楽宮跡、難波宮跡、平城宮跡の調査成果に学び、各機関と協力しながら取り組むことが非常に大事になってくる。**

発掘調査でわかった紫香楽宮の中心部

甲賀市教育委員会事務局
歴史文化財課　小谷徳彦

１．はじめに～文献史料にみえる紫香楽宮～

Ａ．紫香楽宮の造営開始

○天平 14 年(742)2 月 5 日　恭仁京東北道の開通
○天平 14 年(742)8 月 11 日　造離宮司の任命
○天平 14 年(742)8 月 27 日～9 月 4 日　聖武天皇の最初の行幸
　　⇒　恭仁宮の離宮として造営が開始される

Ｂ．大仏造立の詔　天平 15 年(743)10 月 15 日　→　甲賀寺の造営開始

○甲賀郡の調庸を畿内に準じて減免
○東海・北陸・東山道の調庸を紫香楽宮へ
○甲賀寺の造営と大仏造立に行基とその弟子が関与

Ｃ．紫香楽宮から甲賀宮へ

○天平 15 年(743)12 月 26 日　恭仁宮の造営停止
○「甲賀宮」への名称変更　天平 16 年(744)8 月頃
○元正太上天皇が甲賀宮へ　天平 16 年(744)11 月 14 日
○遷都の宣言　大楯槍が立てられる　天平 17 年(745)元日

Ｄ．平城還都

○山火事の頻発　天平 17 年(745)4 月 1 日以降
○大地震の発生　天平 17 年(745)4 月 27 日　以後、余震が頻発
○恭仁宮（5 月 5 日）→平城宮（5 月 10 日）

２．紫香楽宮跡関連遺跡群と宮町遺跡の発見

Ａ．紫香楽宮跡関連遺跡群

○雲井地域（信楽町北部）に奈良時代の遺跡が広く分布
○史跡紫香楽宮跡の６地区　指定範囲が広範囲に分布
○宮殿、寺院、官衙、工房などの諸要素

Ｂ．宮町遺跡の発見と紫香楽宮の中心部の発見

○昭和 40 年代のほ場整備で柱根の出土　→　地元の民家で保管
○年輪年代法による伐採年の測定　天平 14 年秋～天平 15 年春
○昭和 58 年度からの継続的な発掘調査
○平成 28 年度の第 32 次調査以降　紫香楽宮の中心部が見つかる

３．発掘された紫香楽宮の中心建物～主要殿舎を中心に～

Ａ．朝堂区画

a. 正殿 SB292001（第 29・30 次調査で検出）

東で北に 1° 振れる桁行 9 間（37.3m）、梁行 4 間（11.9m）の四面廂付きの掘立柱東西棟建物。身舎の規模は桁行 7 間（31.3m）、梁行 2 間（5.9m）。身舎の柱間寸法は、桁行総長 31.3m（105 尺）を 7 間等間とし、1 間あたり 4.5m（15 尺）、梁行総長 5.9m（20 尺）を 2 間等間とし、1 間あたり 3.0m（10 尺）である。廂の柱間寸法は桁行と梁行ともに 3.0m（10 尺）。

b. 後殿 SB292002（第 29 次調査で検出）

東で北に 3° 振れる桁行 9 間（90 尺）、梁行 4 間（40 尺）の四面廂付きの掘立柱東西棟建物として計画された未完成の建物。柱掘方の平均規模は東西 1.0m、南北 1.1m。掘方のみで柱痕跡を確認できない。門 SB292500・東西塀①SA292200・東西塀②SA292300 と重複し、いずれも後殿 SB292002 が古い。

c. 西脇殿 SB28193（第 28 次調査で検出）

北で西に 3° 振れる桁行 24 間（99.1m）以上、梁行 4 間（11.9m）の長大な掘立柱南北棟建物。身舎の規模は桁行 23 間（96.1m）以上、梁行 2 間（5.9m）。桁行の柱間寸法は、北廂が 3.0m（10 尺）、2～22 間が 4.1 ～4.2m（14 尺）、23 間目 が 4.5m（15 尺）、24 間目が 4.5m（15 尺）以上。梁行の柱間寸法は 3.0m（10 尺）等間。

d. 東脇殿 SB291001（第 29・35・36 次調査で検出）

ほぼ正方位の桁行 21 間(86.1m)以上、梁行 4 間(11.9m)の西脇殿 SB28193 に類似した掘立柱南北棟建物。桁行の柱間寸法は、北から 9 間目と 13 間目が 3.9m（13 尺）である以外、4.1～4.3m（14 尺）。身舎梁行は総長 2 間（5.9m　20 尺）を 10 尺等間。

Ｂ．内裏地区

a. 西建物 SB303006（第 29・30 次調査で検出）

東で北に 4° 振れる桁行 7 間（24.6m）、梁行 5 間（14.9m）の南北二面廂付きの掘立柱東西棟建物。桁行の柱間寸法は 12 尺等間、梁行の柱間寸法は、廂にあたる北端間と南端間を 3.7m（12.5 尺）等間、身舎 7.5m（25 尺）を 3 間の等間割り（2.5m等間）。

b. 東建物 SB401003（第 40 次調査で検出）

東で南に 1° 振れる桁行 7 間（24.6m）、梁行 5 間（14.6m）の西建物 SB303006 と同様の南北二面廂付きの掘立柱東西棟建物。柱間寸法は、桁行が 3.4～3.6m（11～12 尺）、梁行は南北面の廂が各 3.8m（13 尺）、身舎が北から 2.1m（7 尺）、2.5m（8 尺）、2.5m（8 尺）。

西建物 SB303006 と比較すると、東建物 SB401003 は桁行総長が同じで、梁行総長が 0.3m短い。西建物 SB303006 と東建物 SB401003 は、正殿 SB292001 の中軸線を挟んで対になる建物と考えられるが、建物の軸線の向きが異なるほか、両者は南北で約 6.5mずれ、中軸線からの距離も SB303006 が約 10.5m、SB401003 が約 6.5mと、左右対称の位置にはない。

c. 門 SB292500 と東西塀①SA292200・東西塀②SA292300（第 29 次調査で検出）

門 SB292500 は、北に 2° 振れる桁行 5 間（14.6m）、梁行 1 間（3.0m）の掘立柱東西棟建物。南北中軸線上にあり、正殿 SB292001 の北辺から 14.1m北方に位置する。桁行の柱間寸法は、東端間が 2.8m（9.4 尺）、中央 3 間が 3.0m（10 尺）等間、西端間が 2.9m（9.7 尺）と、中央 3 間に比べて両端間がやや短い。梁行の柱間寸法は 3.0m（10 尺）。東西塀①SA292200 が門の東南隅柱に、東西塀②SA292300 が門の西南隅柱に接続する。

４．紫香楽宮中心部の配置と変遷

Ａ．朝堂区画：Ⅰ期

○正殿と東西脇殿をコ字型に配置　古代の宮殿や官衙の中枢部に類似

○正殿の背後に後殿を計画　→　計画変更により後殿を建設せず

Ｂ．内裏区画：Ⅱ期　2 段階に分かれる

a. Ⅱ期（ａ）

○正殿の北方に西建物と東建物を計画　内裏の中心的建物

○西建物に仮囲い　朝堂区画からの遮蔽　→　西建物の建設が先行か

b. Ⅱ期（ｂ）

○後殿の南辺に合わせて、門と東西塀を設置　朝堂区画との分離

○西建物の仮囲いを撤去と東建物の完成

Ｃ．変遷の画期

○後殿の建設中止時期：天平 15 年（743）後半か　税制が畿内に準じる措置

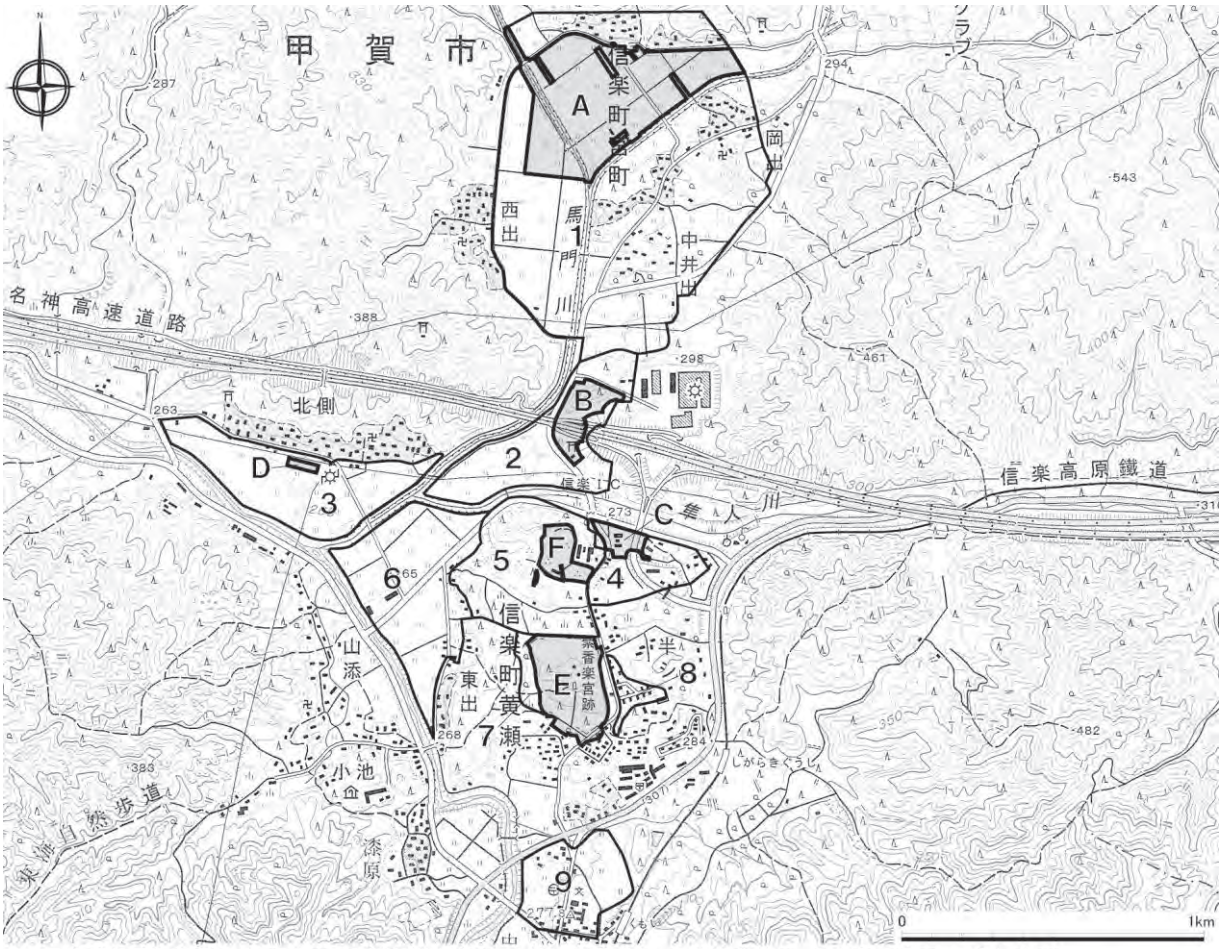
○Ⅱ期（ａ）からⅡ期（ｂ）へ：天平 16 年（744）11 月 17 日

元正太上天皇が紫香楽宮へ移る

⇒　西建物：聖武天皇

東建物：元正太上天皇

５．おわりに



A～F:史跡紫香楽宮跡(A:宮町地区　B:新宮神社地区　C:鍛冶屋敷地区　D:北黄瀬地区　E:内裏野地区　F:東山地区)
1:宮町遺跡　2:新宮神社遺跡　3:北黄瀬遺跡　4:鍛冶屋敷遺跡　5:東山遺跡　6:東出遺跡　7:内裏野廃寺　8:紫香楽宮東遺跡　9:雲井遺跡

図 1 史跡紫香楽宮跡と紫香楽宮跡関連遺跡群　1：25,000

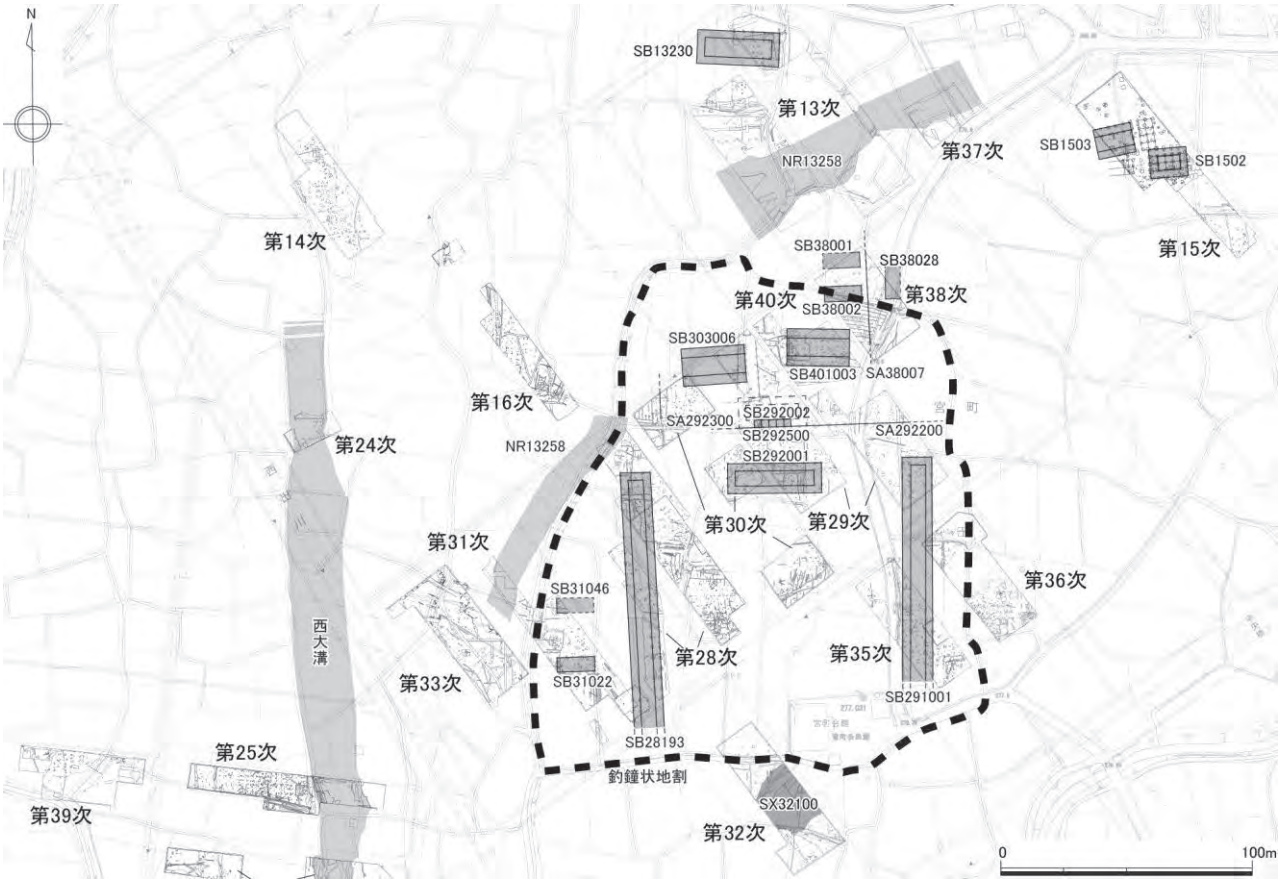


図 2 検出した紫香楽宮跡の中心部と新旧水田地割　1：3,000

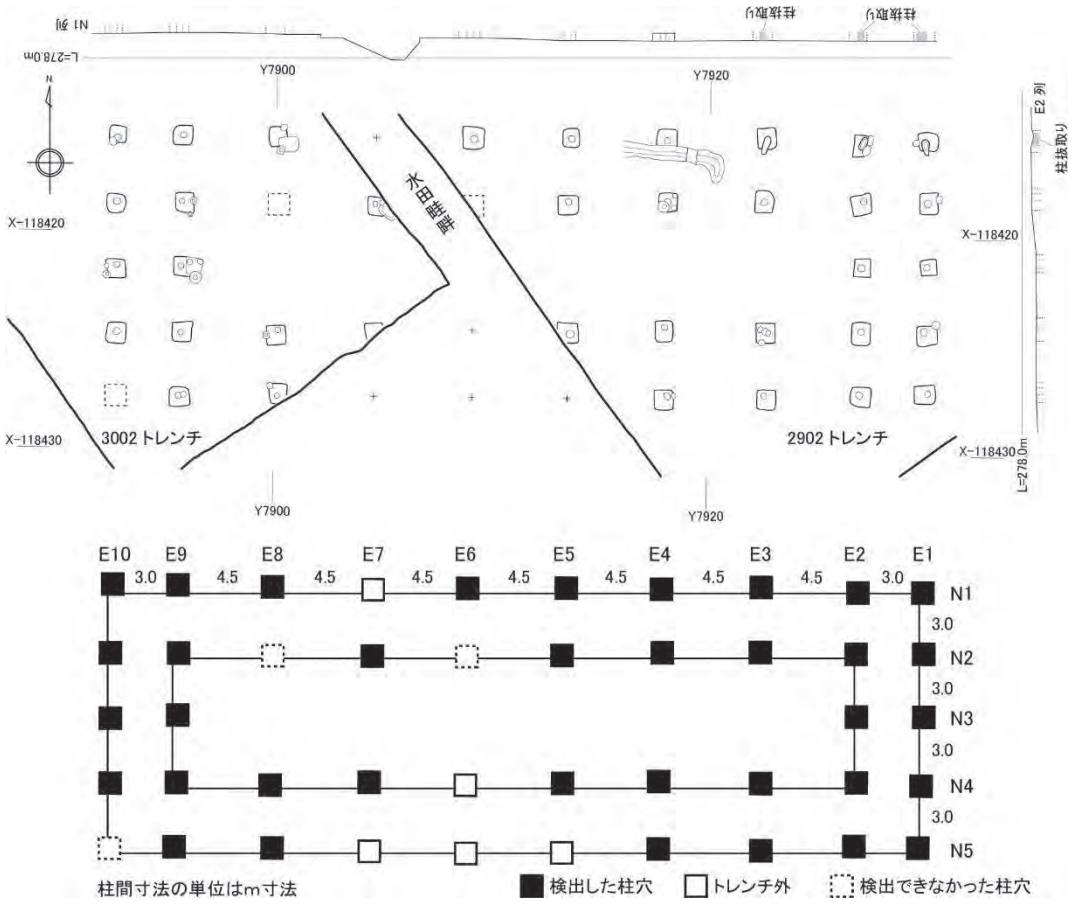


図 3　正殿 SB292001 平面図・模式図　1：350

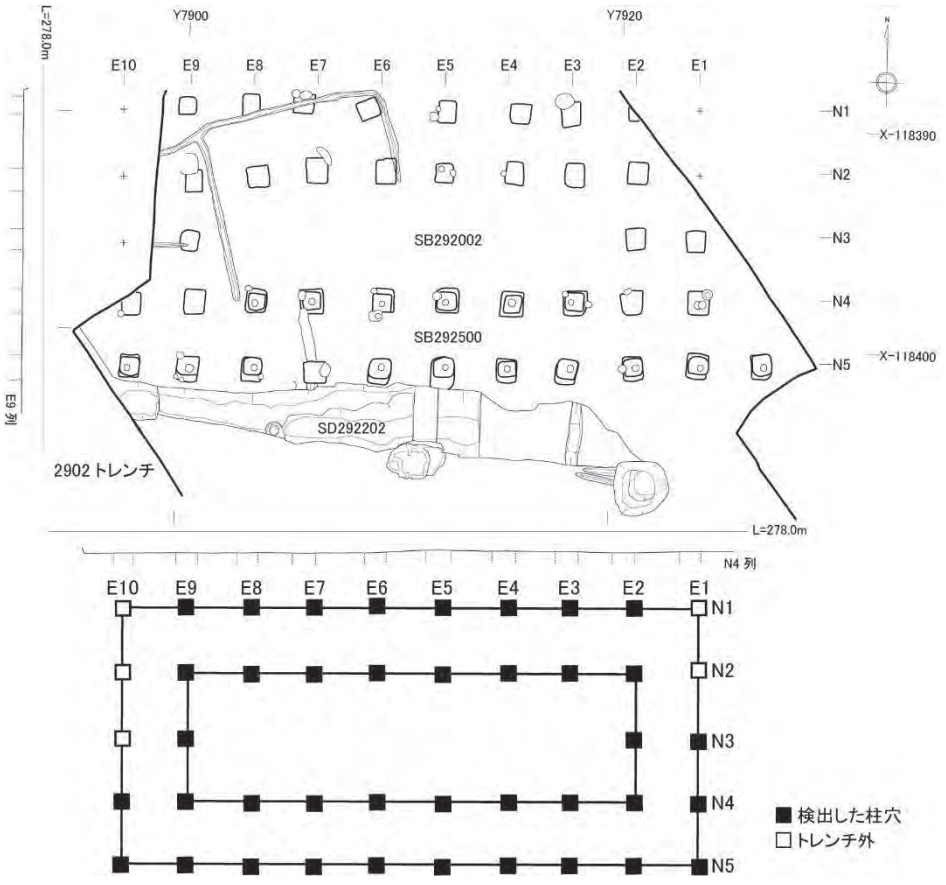


図 4　後殿 SB292202 平面図・模式図　1：350

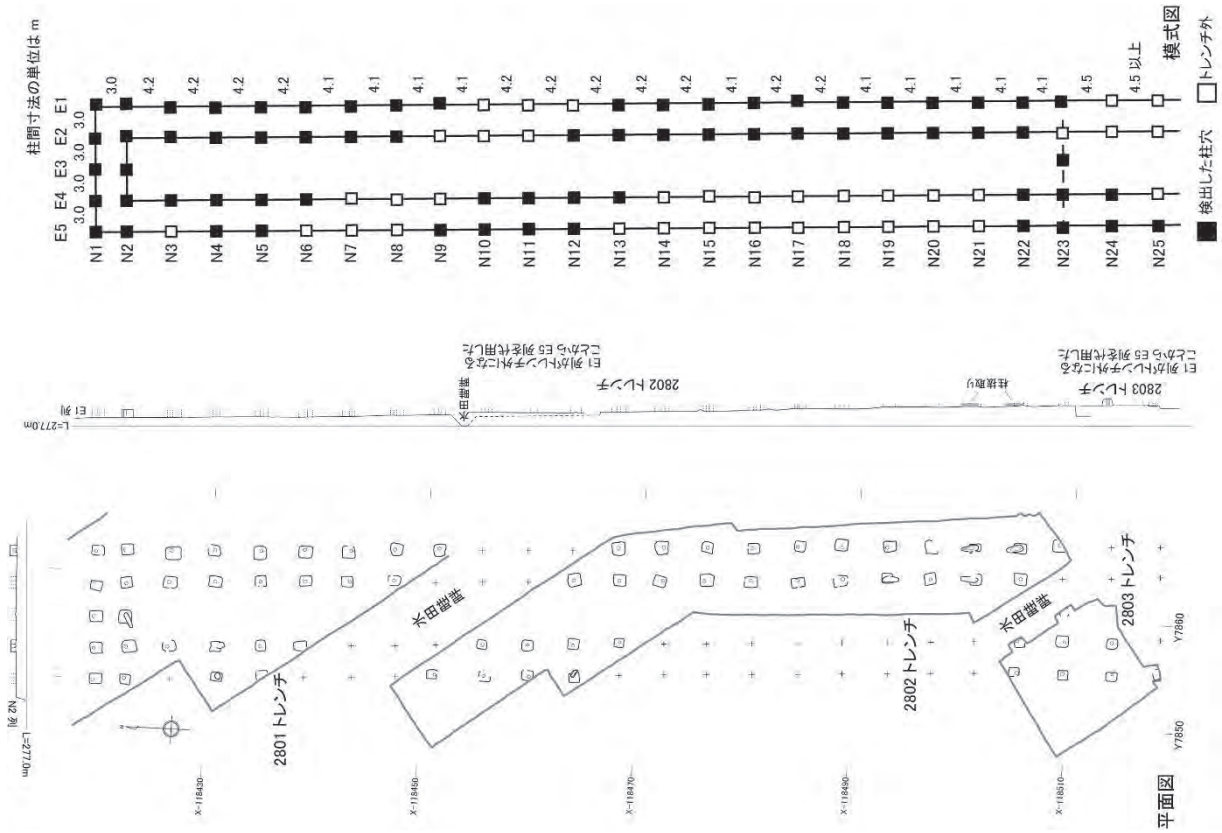


図 5　西脇殿 SB29193 平面図・模式図　1：700

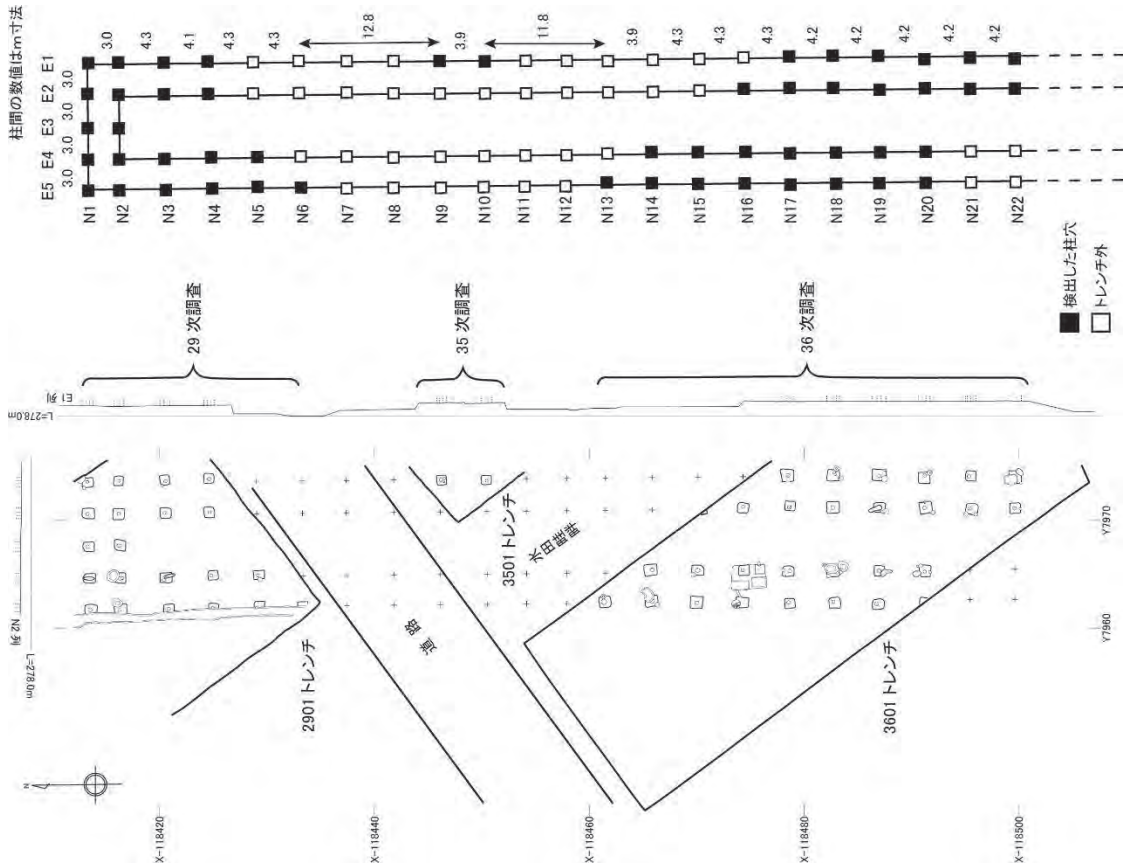


図 6　東脇殿 SB291001 平面図・模式図　1：700

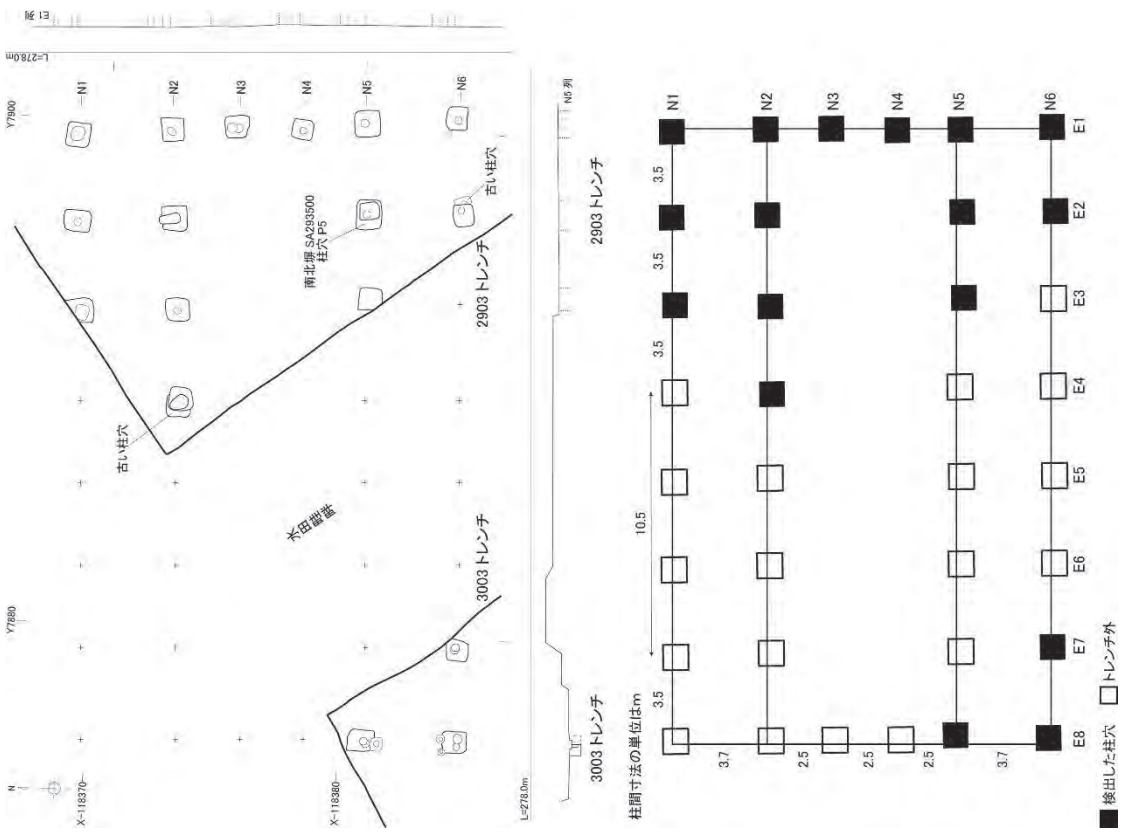


図 7　西建物 SB303006 平面図・模式図　1：300

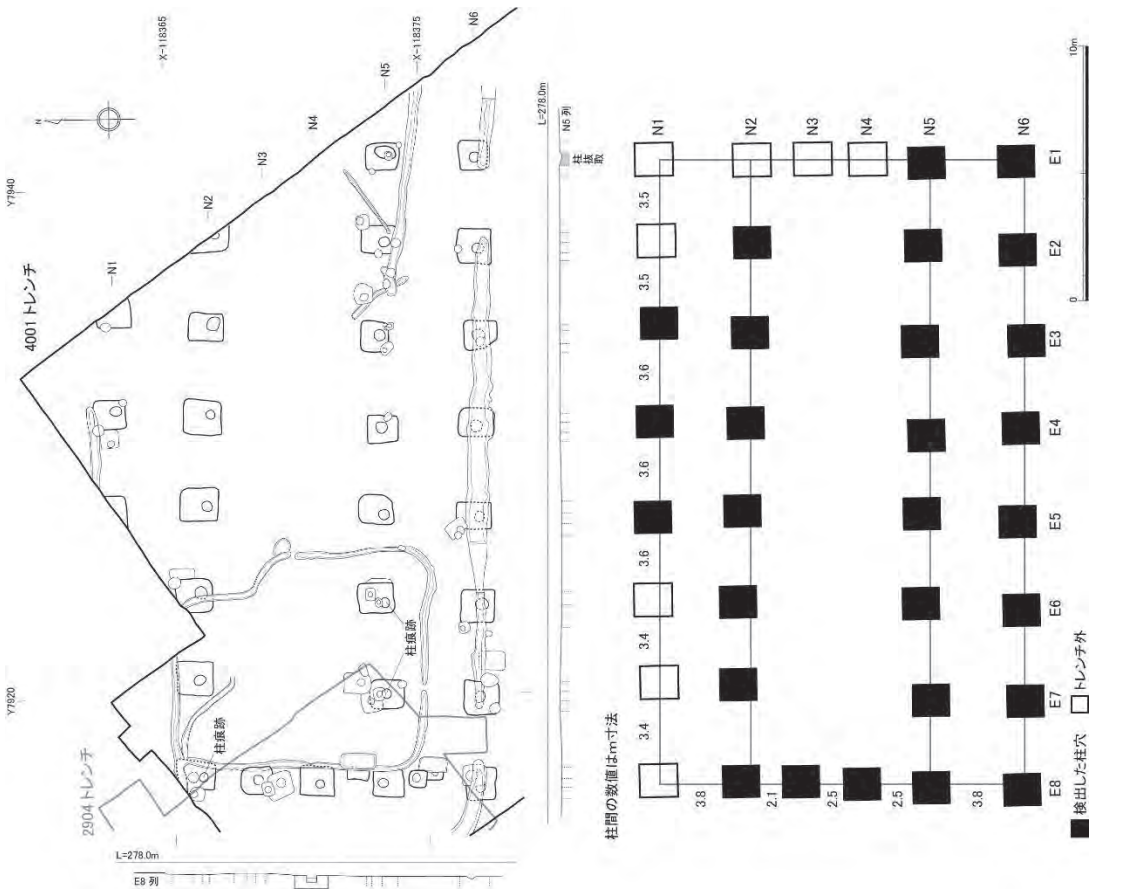


図 8　東建物 SB401003 平面図・模式図　1：300

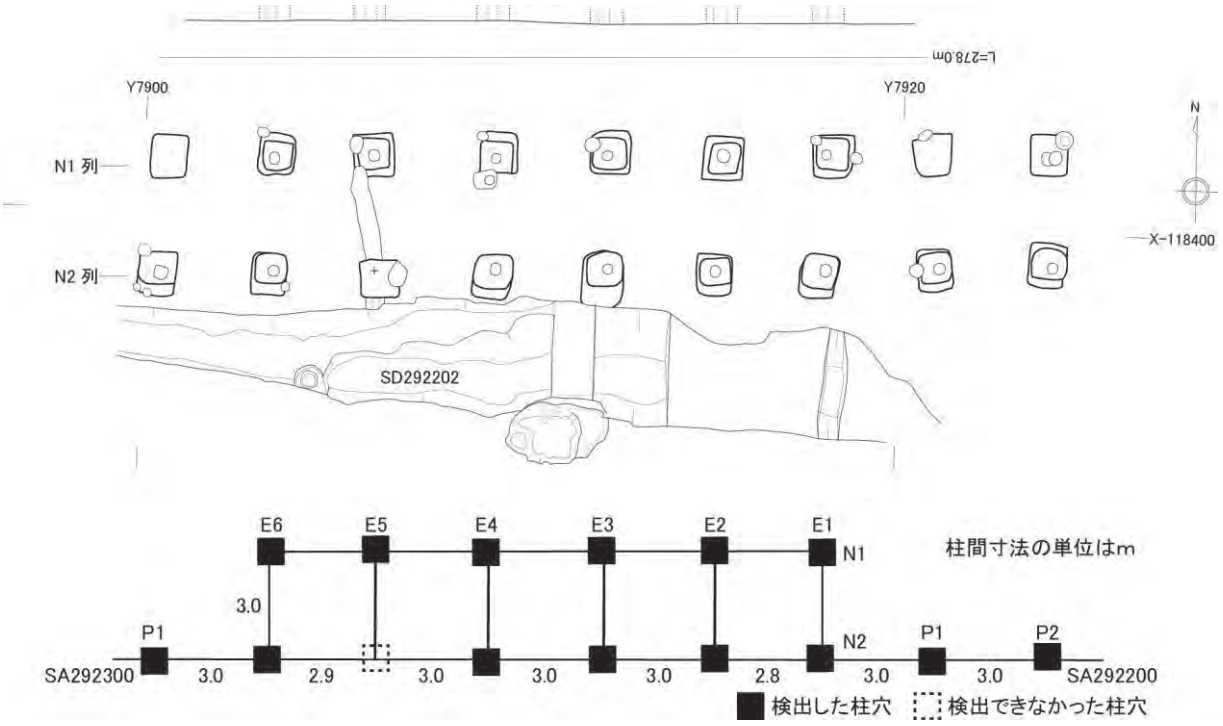


図 9　門 SB292500 平面図・模式図　1：200

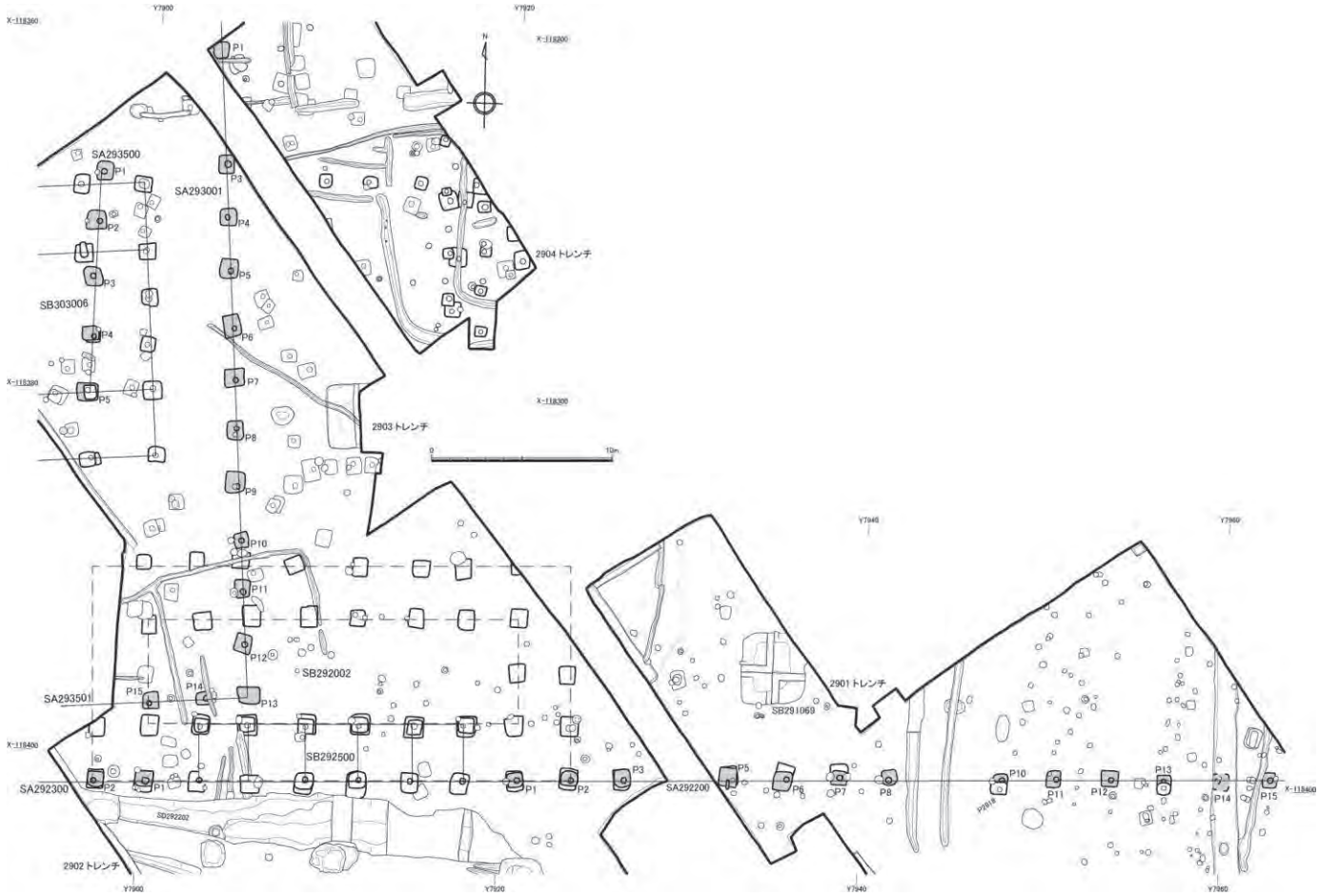


図 10　東西塀①SA292200・東西塀②SA292300　1：400

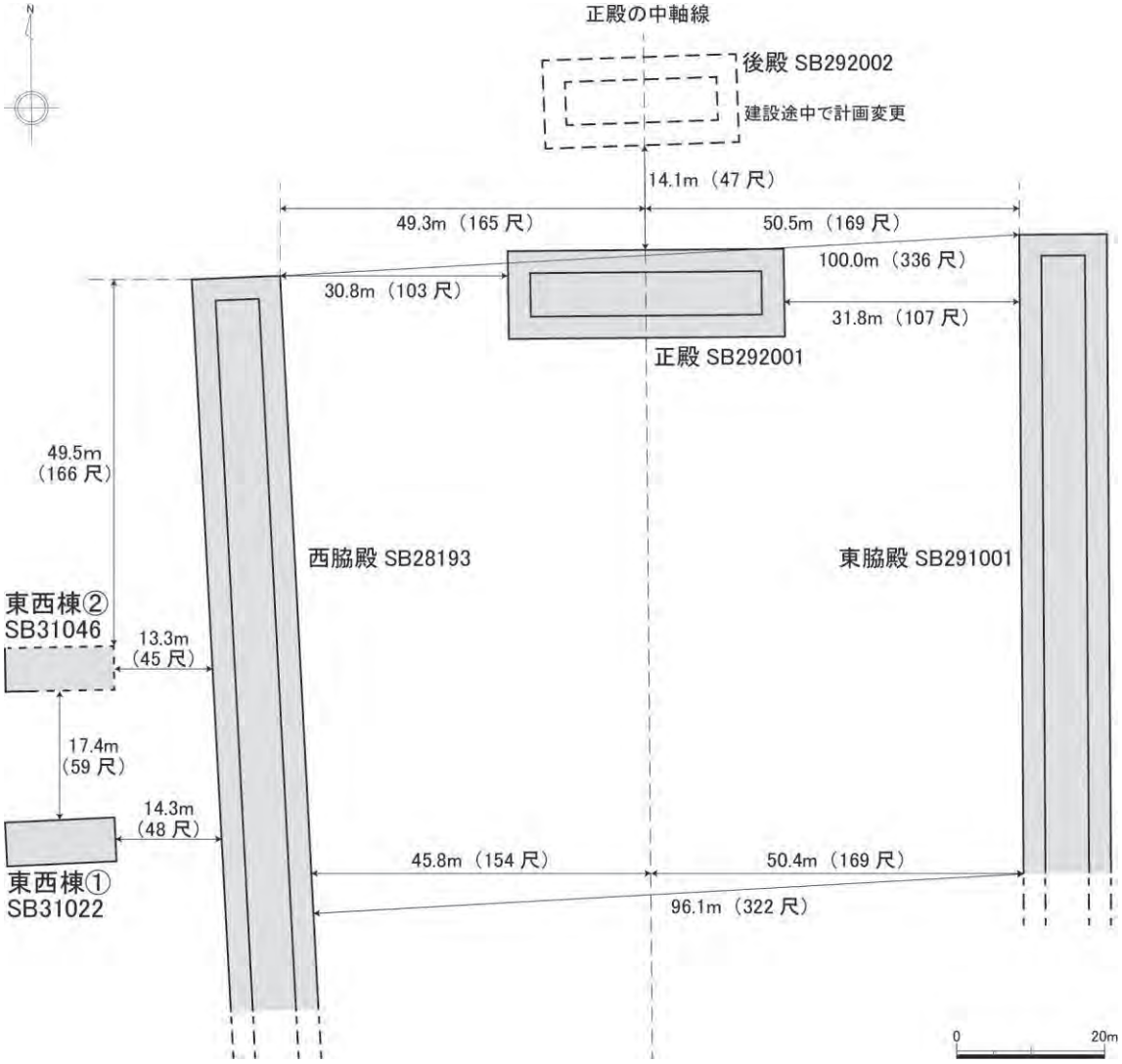


図 11　朝堂区画の建物配置　1：1,000

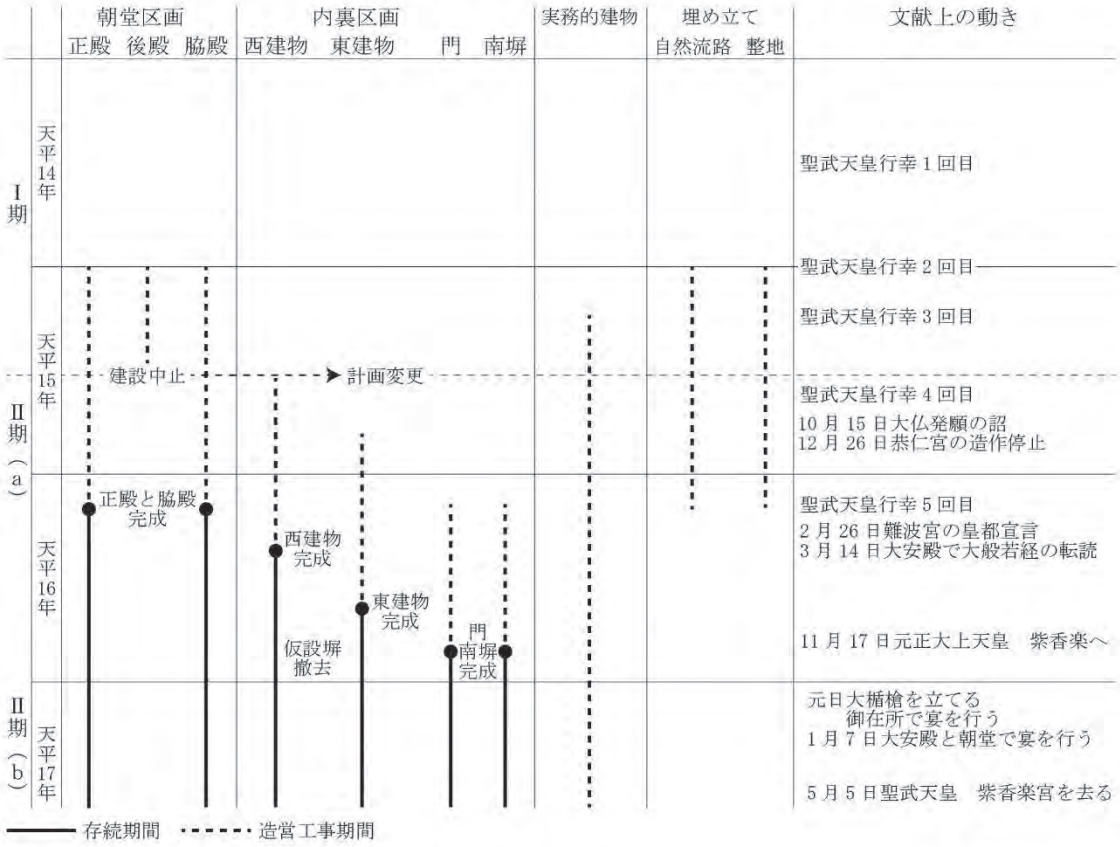


図 12　紫香楽宮中心部の造営変遷

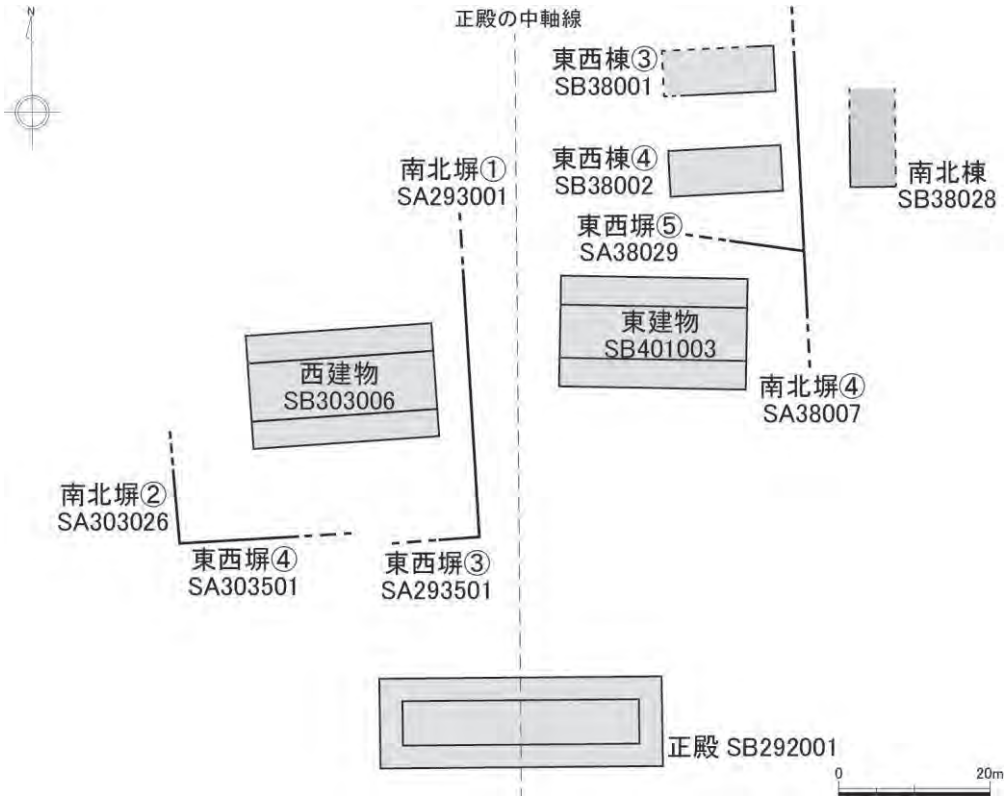


図 13　内裏区画の建物配置（ａ）　１：1,000

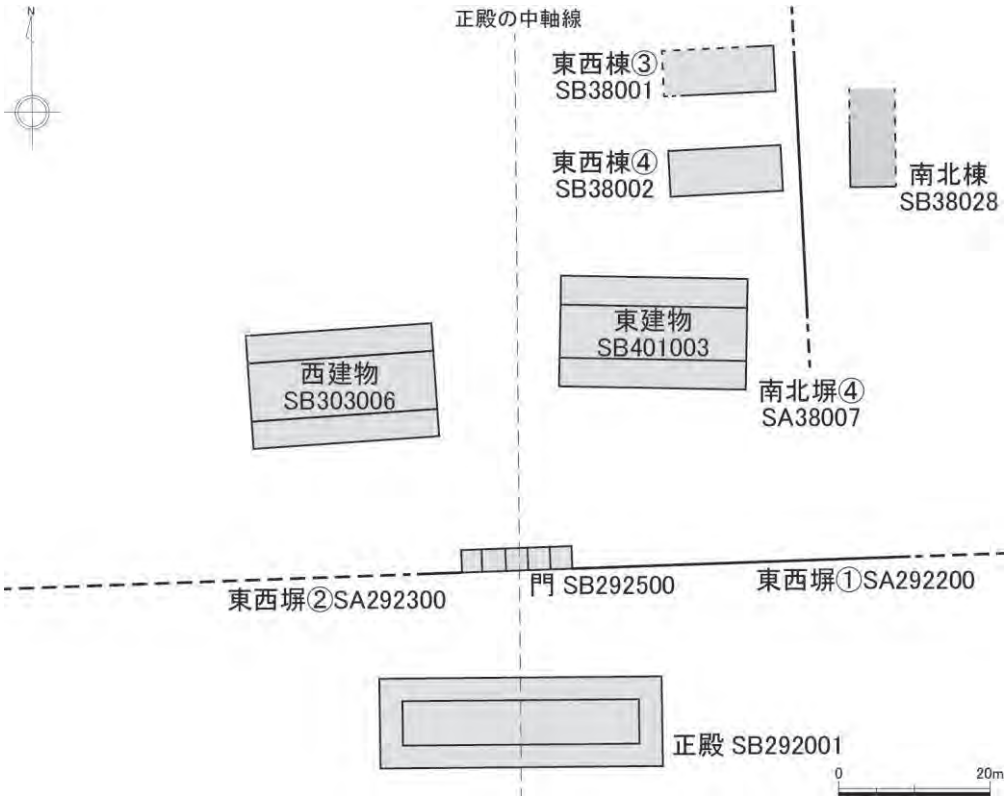


図 14　内裏区画の建物配置（ｂ）　１：1,000